

日本人英語学習者にみられる照応表現の特徴と問題点

--- センタリングモデルによる分析の可能性 ---

駒田ゆき子

三重大学大学院
人文社会科学研究所

komada.yu@zb.ztv.ne.jp

吉田悦子

三重大学人文学部

tantan@human.mie-u.ac.jp

1. はじめに

本研究の目的は、日本人英語学習者(NNS)が使用する照応表現について英語母語話者(NS)と比較することにより、日本人英語学習者の照応表現の特徴と問題点を明らかにすることである。センタリングモデルを利用して、談話内で中心(center: Cb)を担っている談話要素を抽出し、遷移パターンと照応表現のタイプを分析すると、日本人英語学習者は、談話要素の導入、定着、推移の各段階において英語母語話者とは顕著な違いが認められる。このことは、談話形成プロセスにおける首尾一貫性に問題があることを示唆しており、聞き手の理解に困難を生じることが予測される。本稿では、こうした予測が具体的にどんな問題と結びつくのかについて検討する。

2. 先行研究

照応はどの言語においても広範囲かつ高頻度に観察され、言語を習得する上で、照応についての理解や運用能力を高めることはきわめて重要である(村端, 1993, 竹井ほか 2005, 谷村ほか 2005)。英語運用能力の高い上級では、談話の構築において初級や中級に比べて、より適切に照応表現の選択や運用がなされているという報告もあるが、日本人英語学習者の話し言葉の談話における照応表現は、代名詞が選択されるべき場面で名詞句が選択されていることや(谷村, 2004)、新出の要素が継続、展開しないまま、話題が変化する現象が問題点として報告されている(駒田・吉田, 2007)。しかしながら談話のどんな段階で使用される照応表現のパターンが問題となるのかについては明示されておらず、問題点の認識は十分とはいえない。英語母語話者との比較において、日本人英語学習者の照応表現の特徴と問題点を明らかにする必要がある。

3. 言語データと研究方法

利用した言語データは、スピーキングテストに基づいてレベル分けされている The NICT JLE Corpus (和泉ほか, 2004) のデータである。本研究では5つのステージの中からストーリーテリングを取り上げ、日本人英語学習者(レベル9) 8名分 116 発話、同じく日本人英語学習者(レベル6) 8名分 110 発話、と英語母語話者(20~24 歳, 在日期間 1 年未満の米国人男女) 6名分 111 発話をコーパスから無作為に抽出した¹。(以下、日本人英語母語話者を NNS, 英語母語話者を NS とする)。²

分析方法は、これら三者にセンタリングモデルを適用して、以下の3点について分析をする。つまり、1. 話題の焦点 Cb と遷移パターンの分布, 2. Cb の遷移パターンにおける照応表現の分布, 3. 遷移パターンの連続における傾向性、である。

4. 結果

4.1 話題の焦点 Cb と遷移パターンの分布

この節では、談話中の、各発話単位における話題の焦点 Cb について分析する。Cb 及び no Cb の総数は NS が 111, NNS (上級) 115, NNS (中級) 110 である。この Cb の分布を4つの遷移パターン(Continue : CON, Retain : RET, Smooth Shift : SMOOTH, Rough Shift : ROUGH) 及び no Cb を加えて NS と NNS 別に表したのが図 1, 図 2, 図 3 である。

¹ 日本人英語学習者は上級、中級ともに大学生と社会人が中心であり、高校生以下はほとんど含まれていない。

² ストーリーは6枚の絵で構成されており、タイトルは“CAR ACCIDENT”である。発話単位は主動詞を含む節とした。ただし、従属節は基本的に分析の対象から除いている。また、関係詞節や補文は主節に含むことにしたが、分析の対象から除いている。発話単位の認定方法には3種類の方法が指摘されている(谷村, 2004)が、本稿では、Walker *et al.* (1998), Hurewitz (1998) の認定方法を一部修正して採用する。

図1 遷移パターンの分布 (NS)

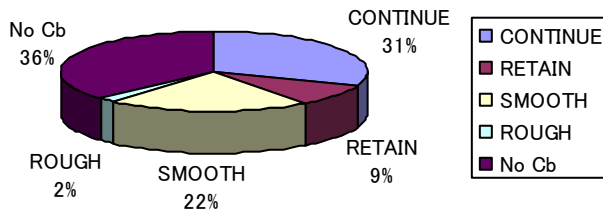


図2 遷移パターンの分布 (NNS上級)

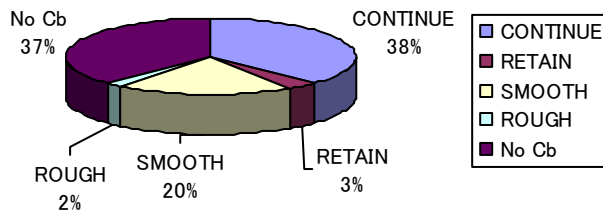
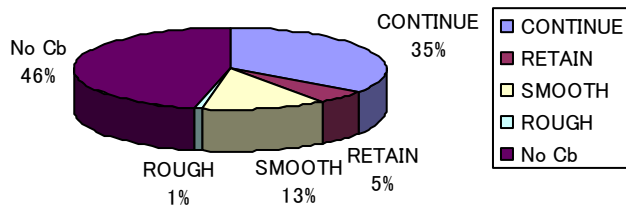


図3 遷移パターンの分布 (NNS中級)



NSでは、全発話数111のうち、no Cbが36%(41 / 111)、CONが31%(34 / 111)で、この二つが全体の3分の2以上を占めている。no Cbとは直前の発話単位中の要素(主語、目的語、その他)が次の発話単位に引き継がれていない場合であり、談話の冒頭やトピックの変わり目などに見られる遷移パターンである。また、CONは直前の発話単位中のCbがそのまま次の発話単位に引き継がれている場合である。このことは、話題の焦点が継続していることを意味しており、CONは受け手にとって最も推論量が少なく、一貫性の高い遷移パターンであるといえる。NSでは、新出の談話要素は直ちに焦点化され、次の発話に引き継がれていくパターン(no Cb→CON)が見られる。

次にno CbとCONに続くSMOOTH-SHIFT(以下SHIFT)は22%(24 / 111)であり、全体の5分の1であった。SHIFTでは、Cbは次の発話では別の談話要素に移行して、話題の焦点の変化を意味する。つまり、NSでは焦点の移動と談話の展開には連続性があるといえる。

さらにRETは、全体の9%(10 / 111)で、話題の焦点Cbが次の発話単位では移動することを予想させる遷移パターンである。RETは、CONとSHIFTのつなぎの役割を担い、NULL-CON-RET-SHIFTという好ましい談話の流れにおいて、必要な遷移パターンである(Grosz et al, 1995)。CON-RET-SHIFTの典型的な焦点の移動の例を挙げる。

(1)

16. and it broke.	CONTINUE
17. And <i>this guy</i> had the audacity to ask me to pay for his <i>cell phone</i> .	RETAIN
18. And <i>this guy</i> got angry at me for running into his car.	SMOOTH SHIFT

<Native File No. 00013>

NSでは数の差はあるが、NULL、CON、RET、SHIFTがまんべんなく生起している。これは、NSの談話が言語的な結束性を保ちながら、スムーズに展開していることを意味しているといえる。

このNSの結果をNNS(上級・中級)の結果と比較すると、NNS(上級)では局所的な焦点の移動はNSと同じような頻度で生起しているといえる一方、SHIFTの割合がほぼ同じであるのにRETが少なく、RETを介さずにSHIFTが起こっていることが予測できる。すなわち、no Cb→SHIFT、CON→SHIFT、SHIFT→SHIFTなどの遷移パターンの連続が多いのではないかと予測される。

NNS(中級)について分析すると、中級の特徴はno Cbの割合が高く、Cb全体の約半分を占めていることとSHIFTの割合が低いことである。no Cbが多いことは、話題の焦点Cbの要素が次々と変化していることを示し、発話間の局所的なつながりが弱く、首尾一貫性に欠けることにつながりやすい。SHIFTの割合はNS22%やNNS(上級)20%に比べて、13%と少なかった。CONの割合は35%であり、NS(31%)やNNS(38%)とほぼ同等であるので、焦点を継続することはできるが、談話の展開に伴って焦点を移動させることは困難であると予測できる。³

4.2 Cbの遷移パターンにおける照応表現の分布

NSとNNSを遷移パターン別の照応表現を比較す

³自然発話ではROUGH-SHIFTの生起はきわめて少数であり、no Cbとはほぼ同じ現象として扱ってもかまわないとされている(Hurewitz, 1998)

と、まずNSでは、CON遷移の90%以上をゼロ代名詞(44%)と代名詞(47%)が担っていた。それに対してNNSの上級と中級では代名詞が最も多く(上級67%, 中級73%), ゼロ代名詞はどちらも少なく、NSの44%に対してNNS(上級)では14%, NNS(中級)では13%であった。ゼロ代名詞の頻度については、NNSの上級と中級で差がないことから、英語能力に原因があるのではなく、むしろ母語話者と学習者の間に質的な違いがあると思われる。RETでは、NS, NNS(上級), NNS(中級)ともにすべてのCbは代名詞と名詞句で担われていた。SHIFTについては、NS, NNS(上級)では名詞句が最も多く、NNS(中級)では指示代名詞が多かった。一般に、名詞句は談話の導入時や話題の変更時に見られる傾向があるので(神崎 1994), SHIFTの照応表現に名詞句が選択されているのは自然である。⁴

4.3 遷移パターンの連続における傾向性

新出の談話要素が定着、継続する過程であるNULL-CON, CON-CONはNS, NNS(上級), NNS(中級)共に最も多く生起している。しかし、NS, NNS(上級)ではNULL-CONよりCON-CONが多い一方、NNS(中級)ではCON-CONよりもNULL-CONのほうが多かった。NNS(中級)では話題の焦点の継続よりも新出の談話要素が次々と現れているといえる。SHIFTに関する遷移パターンの連続では、NSではまんべんなく生起しているが、NNS(上級)ではSHIFT-SHIFTが特に多く、一方NNS(中級)では1例も見られなかった。

5. 考察

ここでは、4章のセンタリングモデルによる分析をもとに、次の4点についてさらに詳細に検討する。すなわち、1. RET-SHIFTの生起パターンに見られる談話の展開 2. no Cbの連続に見られる間接照応と首尾一貫性とのかかわり 3. 代名詞の使用と節の連結パターン 4. SHIFT遷移に見られる間接照応: トポニミーとパートニミー、について考察する。

5.1 RET-SHIFTの生起パターンに見られる談話の展開

NNS(上級)はRET以外の各分布の割合がNSとほぼ同じであったが、RETについてはNSの9%に

対して、NNS(上級)は3%であった。これはNSの3分の1にすぎない。すでに4.1で述べたように、RETはNULL-CON-RET-SHIFTという好ましい談話の展開において(Grosz et al. 1995), CONからSHIFTへ移動するときに、言語的結束性を伴ったつながりを構築する役割を担う遷移パターンである。RETの生起が少ないことは言語的結束性を伴ったRET-SHIFTのパターンがNNSでは少ないことを意味している。つまり、NNSの中心の移動は言語的な照応関係による結束性よりも、談話標識などの接続語に依存した唐突な移動が多いといえる。

NNS(上級)の被験者は、他の遷移パターンについてはNSとほぼ同じ割合であるにもかかわらず、RETについてはNSとの間に顕著な差がみられた。NSにもRETを介さないCON-SHIFTのパターンがみられるが、これは、たとえば、he→theyという<部分>と<全体>の関係(メトニミーの認知プロセス)をSHIFTとした事例や(5.4を参照)、談話指示のitやthatをSHIFTとした事例であり、性格が異なる。

5.2 no Cbの連続に見られる間接照応

NNS(中級)ではno Cbの割合が46%と遷移全体の約半数を占めており、言語的照応関係による結束性はNSやNNS(上級)にくらべて低い。しかし、そのことはまったく一貫性に欠ける談話であることを必ずしも意味しない。そこには語用論的推論と呼ばれる、「文脈や言語外の知識を背景として誘引される推論」(山梨 1992: 14)による談話の結束性がみられた。たとえば、*accident*という語から受容者は、一般に「車とバイクがぶつかる」という行為を容易に理解することができ、*accident*という名詞の持つ「一般的な知識のフレームの典型的な値」(山梨 1992: 14)として、後続文では *I hit the back of the bike, no body was injured, the bike was broken.* が *accident* に呼応して理解される。そこでは、*accident* はトピックの役割を担い、談話の展開において「談話の重要なテーマとなる部分を焦点化し、その焦点化された部分が起動する文脈に存在する対象に焦点を移動していく」(山梨 2004, : 23) 過程をたどることができる。このような焦点推移による談話の展開がNNSのファイルにも見られ、焦点移動の連鎖が可能となり談話の一貫性に貢献している。

5.3 代名詞の使用と節の連結パターン

この節では、CON遷移を担う照応表現としてNNSではゼロ代名詞の生起の割合がNSと比べて低い点

⁴ また、NNS(中級)でSHIFT遷移に指示代名詞が多いのは、談話指示のitやthatの生起が多いためであった。

に注目する。ゼロ代名詞が少ない要因は節の連結の
パターンの違いによるものである。すなわち、NS
では現在分詞、接続詞とゼロ代名詞、接続詞と代名詞
のパターンが共起しているのに対して、NNS では接
続詞の後に代名詞を明示するパターンが多いため
である。これは、母語である日本語の用法とは異なる
人称代名詞の用法に忠実であろうとして、照応表現
の選択が単一になっているものと考えられる。

5. 4 SHIFT 遷移に見られる間接照応：トポニミー とパートニミー

最後にこの節では、推論によって引き起こされる
潜在的な情報に基づいて理解される照応現象もある
ことを示す。4.3 で示したように、NNS（上級）では
SHIFT-SHIFT の連続のパターンが、NNS（中級）で
は NULL-SHIFT の連続のパターンが多くみられた。
こうした連続は好ましい遷移パターンではないとされ
ている（Poesio *et al.* 2004, Grosz *et al.* 1995）。しか
し、実際には、NS にも同様の例が見られ、必ずしも
一貫性が損なわれているわけではない。たとえば、
police は警察という組織や建物を指す語であり、
policeman はその中で勤務する構成員という意味で
ある。実例では、*police* と *policeman* は意味の上では
区別せずに用いられている。この現象はトポニミー
と呼ばれ、「＜トポス＞としての場所（ないしは空間）
とそこに位置づけられる存在の隣接関係にもと
づく認知のプロセス」（山梨 1992）と解釈すること
ができる。⁵ さらにパートニミーの照応関係も NS、
NNS 両方のデータに見られた。⁶ つまり、
NULL-SHIFT の連続や SHIFT-SHIFT の連続は焦点の
移動の連続というより、Cb がメトニミーと呼ばれる
潜在的な照応関係に置き換わっているのである。

6. まとめ

本研究で明らかになった日本人英語学習者の照応
表現の特徴と問題点は以下のように要約できる。

1. NNS では中心の移動が言語的結束性を伴うも
のが少なく、接続表現に依存した唐突な談話展開で
ある。

⁵同様に Prince が *Inferable* と分類した照応のパターンということ
もできる。たとえば、*bus-driver*, *house-door*, *kitchen-sink* などは言
語的には照応関係を持たないが、一般的にはこれらの要素は存在
の前提である実体として共有されているので、推論を介した照応
である（Prince 1981）。

⁶たとえば、＜全体＞を構成している *two people* や *they* とその
一部分である *Tim* と *Jimmy*＜部分＞が、話題の焦点 Cb として連
鎖を形成している。

2. NNS（中級）で *no Cb* の分布の割合が特に高い
ことは、明示的、言語的な照応関係の構築が NS や
NNS（上級）に比べて未熟であることを示す。しか
し、テーマを焦点化することによって推論による焦
点連鎖が構築され、談話の一貫性を補っている。

3. NS と NNS では、CON 遷移における照応表現の
選択に違いがあったが、それは発話と発話とをつな
ぐ連結パターンの違いによるものである。

4. 明示的な言語情報のレベルでは結束関係を認
めることはできないが、言語外の知識を背景とする
推論によって結束性が保たれている照応関係はメト
ニミーと呼ばれ、現象の下位類としてのトポニミ
ー：空間 / 場所の近接関係にもとづく現象と、パー
トニミー：部分 / 全体の近接関係にもとづく現象が
NS と NNS とともに共通して見られた。

最後に、中級以上の学習者では、言語的な結束性
を伴った焦点移動の習得が、首尾一貫性を備えた談
話構築には欠かせないことを指摘したい。こうした
知見に基づく言語教育の視点は、英語学習において
習得が難しいとされる照応表現の指導に活かせる可
能性があり、さらに今後の課題として取り組みたい。

参考文献

- Grosz, B. J., A.K. Joshi & Weinstein, S. (1995)“Centering : A
framework for modeling the local coherence of discourse.”
Computational Linguistics, 21/2, 203-225.
Hurewitz, F. (1998)“A quantitative look at discourse
coherence” In Walker, A.K. Joshi, and E. Prince. (eds) *Centering
Theory in Discourse*, 273-291. Oxford : Clarendon Press
和泉絵美・内元清貴・井佐原均 (2004)『日本人 1200 人の英語ス
ピーキングコーパス』東京：アルク
神崎高明 (1994)『日英語代名詞の研究』東京：研究社
駒田ゆき子・吉田悦子(2007)「日本人英語学習者コーパスを利用
した照応表現と談話の一貫性の考察」『言語処理学会第 13 回
年次大会発表論文集』1038-1041.
Poesio, M., Stevenson, R., Di Eugenio, B., and Hitzeman, J.
(2004) “Centering : A parametric theory and its instantiations”
Computational Linguistics, 30/3, 309-363.
Prince, E. (1981)“Toward a taxonomy of given – new information”In
P. Cole(ed.), *Radical Pragmatics*. N. Y. 223-56.
竹井光子, 相沢輝昭, 藤原美保 (2005)「コーパスとしての教材：
語学教師のための分析とツール」『言語処理学会第 11 回年次
大会発表論文集』.CD-ROM
谷村緑(2004)『日本人英語学習者の談話における照応表現習得過
程—横断的研究に基づいて—』(大阪外国語大学博士論文シ
リーズ vol.30) 大阪：大阪外国語大学言語社会学会
谷村緑, 竹内和広, 伊佐原均 (2005)「英語教育のための照応詞使
用についての調査」『言語処理学会第 11 回年次大会発表論
文集』 CD-ROM
村端五郎 (1993)「英語母語話者と非英語母語話者による推論照
応の先行詞の認定」『中部地区英語教育学会紀要』23, 45-150.
Walker, A.K. Joshi, and E. Prince. (eds)(1998) *Centering Theory in
Discourse*, Oxford : Clarendon Press.
山梨正明 (1992)『推論と照応』東京：くろしお出版
山梨正明 (2004)『ことばの認知空間』東京：開拓社